



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター一年報

2013

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2013』目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長	山本 登朗	1
<小論文>			
学生自身の生き方を問う「生徒・進路指導論」の授業 ～児童生徒の葛藤に寄り添うために～	非常勤講師	南 悟	2
G.H. ノイヴェークにおける<知識/技量>の意味論 ——教員養成における<理論/実践>問題の手がかりとして——	非常勤講師	山名 淳	11
小学校家庭科教育の課題と学校教育上の位置	文学部教授	山本 冬彦	21
<報告>			
関西大学「教職概説」の一クラスにおける学生たちの教科の好き嫌い	非常勤講師	池上 徹	31
「教育実習・教職実践演習・教育実習事前指導」についての報告	非常勤講師	尾崎 進	37
体罰問題をどう扱うか—学生の経験と意見より—	非常勤講師	保田 その	42
<ショートレポート>			
「多文化主義」教育の現在	非常勤講師	印藤 和寛	48
学校映画のすすめ	非常勤講師	椎口 育郎	55
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科			58
介護等体験 参加者数			60
中学校・高等学校教育実習生数			61
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧			62
教員採用試験合格者状況・合格者数			69
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果			72
教員採用試験 試験日・合格発表日等			73
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～			75
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について			76
介護等体験事前指導について			78
本学卒業新任教員の方々との情報交換会について			79
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について			80
教員養成フォーラムについて			82
教員採用試験合格者との情報交換会について			84
教職専門科目担当者研究会について			86
教員採用試験合格者壮行会について			87
教職に関する専門教育科目担任者一覧			88
教育実習出向指導校一覧			94
教職支援センター 利用状況			96
教員免許状更新講習一覧			98
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領			99
教職支援センター委員会委員名簿			101
教職支援センター規程			103

学校映画のすすめ

関西大学非常勤講師 椎口 育郎

映画はそのときどきの時代を反映しています。人々が何を求めているのか、映画の作り手は作品にどのようなメッセージを込めようとしているのか。その後、できあがった映画を観るという行為を通して、人々の期待や願望はどのように共振し、再現していくのか。そこに時代の精神といったものが分かりやすい形であらわれているともいえるでしょう。

時代の状況と学校や教育のありようを考える手がかりの一つとして、若い皆さんに学校映画を観ることをおすすめします。ここで学校映画とは、学校を主な舞台にしていたり、学校を多少なりとも物語の背景に置いているものとしておきます。今はいろいろな作品がDVDになっていてレンタル店でも手軽に借りることができます。是非、面白い学校映画をたくさん観てほしいと思います。

今回は、戦後（第2次世界大戦が終わってからです。70年近くも時が経つのですね。若い皆さんには「戦後」という言葉自体がピンとこないでしょうが・・・）の新しい社会とその後の発展のなかで作られた学校映画を二本紹介しましょう。『山びこ学校』と『キューポラのある街』です。ややノスタルジックかもしれませんが、かつてこんな映画があったということを知っておくのもよいでしょう。

映画『山びこ学校』のテーマはく戦後民主主義教育における学校の息吹とでも言えるでしょうか。民衆の望む映画作りを目指した独立プロ運動のなかで1952（昭和27）年に今井正監督によって制作されました。当時としてはまだ普通だったモノクロ映画です。前年にベストセラーとなった無着成恭編『山びこ学校——山形縣山元村中学校生徒の生活記録』を映画化したものです。木村功や東野英治郎など新劇畑の俳優が多数出演しています（「新劇」という言い方も今は古いですね。「新劇」は西欧近代演劇の影響を受けたリアリズムを基調とする演劇です）。舞台は山形県山元村の新制中学校。生徒たちは頻繁に欠席しています。貧しい村で生活するために人々は必死で働かねばならず、欠席している生徒は家の仕事を手伝っています。修学旅行に行く費用が出せない生徒のために他の生徒たちはみんなで協力できることを話し合います。新任教師の無着は、どうすれば貧困をなくせるか、みんなで考えようとありのままの生活を正直に作文に綴らせようとします。彼は、生活作文に力を入れることが民主教育の中心的課題であると考え、村人たちの反対にあいながらも実践に取り組んでいきます。子どもたちは真剣に話し合い、自治や連帯のあり方を学んでいきます。貧困のなかで病気で母親を失った級友を皆が励まし、支えていこうとします。やがて、皆の手作りの文集『きかんしゃ』ができあがります。・・・

尚、映画の中で登場人物が語る台詞は方言です。そのため、やや聞き取りにくかったり、意味が分かりづらいところがあるかもしれませんが、方言は生活の言葉であり、この映画には不可欠の要素です。それによって作品に味わいと奥行きが保たれています。

戦時中弾圧された生活綴方運動は、戦後『山びこ学校』を契機に復活します。地域の学校現場の内発的な思想運動として、子どもの教育の方法として、様々な教育実践に影響を

及ぼしながら発展していきました。

『山びこ学校』の意味は大きなものだったのですが、その可能性と限界をどのように捉えるべきでしょうか。映画の原作、無着成恭編『山びこ学校』（1951年 青銅社 現在は岩波文庫版で読むことができます）は今ならどのように読み解くことができるでしょうか。また、佐野真一著『遠い「山びこ」』（新潮文庫 2005年）は教師無着成恭と43人の教え子たちのその後40年の人生を追ったすぐれたルポルタージュです。これも参考になるでしょう。

映画『キューポラのある街』は、1962年、浦山桐郎監督によって制作されました。前年に出版された早船ちよの同名小説を映画化したものです。主演は吉永小百合、当時16歳でした。映画会社は日活、アクション映画が全盛期で、それらはカラーの作品が多かったのですが、この作品はその脇で公開された地味なモノクロ映画でした。しかし、後々名作として語り継がれることになります。

経済の高度成長の時代、世界一の大都市となった東京に隣接する埼玉県川口市が舞台です。そこはキューポラと呼ばれる鑄鉄溶銑炉の煙突が目立つ鑄物職人の街です。産業構造の転換が進むなか、小さな町工場は近代化・合理化を迫られ、古い鑄物職人は職を失っていきます。ジュンは中学三年生の多感な少女。高校進学か就職か、進路選択の問題で悩んでいます。鑄物職人の父親の失業、母親の出産によって貧しい一家の暮らしはさらに苦しくなっています。ジュンはパチンコ屋でアルバイトをしたり、やんちゃな弟タカユキが引き起こす面倒の後始末をしたりと、なかなかのしっかり者です。父親は職人氣質で上手く世渡りができず、酒浸りの日々です。母親は居酒屋に働きに出て酔客に愛想を振りまいています。ジュンはそんな両親の姿に幻滅し、反発します。親子関係の葛藤、思春期特有の心身の揺れや変化が描かれていきます。そうしたジュンと家族の物語を中心に、いくつもの社会問題が織り込まれています。貧富の差と教育、産業構造の転換、都市化、中小企業労働者の労働条件、労働組合の役割、民族差別、在日朝鮮人の北朝鮮帰還運動、等々です。そうした中でジュンやタカユキと在日朝鮮人の友だちとの間の友情と別れが物語の一つの軸になっています。やがてジュンは就職し、同時に、定時制高校へ進学することを決意します。映画は、未来への希望をもち、働き、学ぶことによって成長し、大人になっていくであろう彼女のその後を暗示します。・・・

その頃、高校進学率はまだ6割ほどで、全日制高校へ進学する者も今ほど多くありませんでした。就職をし、且つ、定時制高校で学ぶという若者も少なからずいました。映画の中のジュンはあちらこちらにいたのです。私はジュンと同世代です。映画の中に登場する人々、風景、子どもたちの生活世界は、私の記憶にも重なってきます。中学校に上がる前、「僕、国に帰るねん」とぼつりと言い残し、クラスの皆と別れていった在日朝鮮人のU君。友だちだった彼は、今、どうしているだろうか、と思います。『キューポラのある街』の時代からずいぶん遠くへ来たものです。私などはこの映画を観るたびに、懐かしさを覚えるとともに、改めて当時と今を比べながらいろいろな問題を考えさせられるのですが、若い皆さんが観ればどうでしょうか。

かつて学校現場では、教育の「論」から議論するという流儀が当たり前だったものです。民主教育論、国民教育論、解放教育論、同和教育論、平和教育論……。しかし、いつの間にかそうした「論」から議論しようという雰囲気は急速に後退しました。一方で、「もう、そういうことは古い。いかに改革するかだ」と「教育改革」言説がしだいに力を増していきました。そして今、日本社会の激変とグローバル化の進展の中で、学校も教員も、ますます「改革」に追われています。一方で、教育全体がさらに見えなくなっていくようです。

意味のある「改革」はもちろん必要だとしても、地に足をつけた議論をしていかなければなりません。同時に、私たちに問われているのは、教育全体を語る言葉をどのように取り戻すのかということでしょう。まずは、かつていろいろな「論」があったということを確認すること、その中から何を否定し、何を継承していくのかという腑分けをしていくことが必要ではないかと思います。映画が、案外、そうした作業のヒントを与えてくれるかもしれません。